

令和 6 年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①インクルーシブ教育実践推進校としての取組を主軸に、系統的な教育課程を構築する。 ②1人1台端末を活用し「主体的・対話的で深い学び」を追究した授業実践を組織的に積み重ね、「自ら学び続ける生徒」を育てる	①すべての生徒のニーズを踏まえた教育課程を構築する。 ②1人1台端末を活用した実践研究を活かした授業改善により、生徒の主体的な学びの力を育む。	①すべての生徒のニーズに応じた教育課程の検討を行う。 ②1人1台端末を用いて「どのように学習効果を高められるか」を意識した組織的な授業改善を行う。	①生徒にニーズに応じた教育課程の検討が行われたか。 ②校内研修会、研究授業を通して教職員の意識が高まり授業実践が進んだか。	①生徒にニーズに応じた教育課程の検討を始めている。また、これまでの実績が認められ、支援・広報グループ支援チームに対し「職員功績賞（教育長表彰）」が贈られることになった。 ②校内研修会、研究授業を通して朝学習やロイロノート等の効果的な活用方法を職員間で共有することにより1人1台端末の利用が促進され、あまり使用しない人が活用するようになった。	①検討をより進めて早い時期に教育課程の改善を行う。 ②一定の効果は出ているが、1人1台端末の活用頻度に個人差があるので、教員の意識を高め更なる授業改善に努めていく。	①全体的に生徒は真面目で落ち着きが見られ、熱心に授業に取り組んでいる。今後とも地域に期待される学校であり続けることを望んでいる。 ①「地域の中堅校」として認知されていることが多いが、地域全体から見ると本校は進学者希望者が多数を占める学校であり、今後もその進路希望を実現するための教育の質を継続して高めていく必要がある。また、インクルーシブ教育実践推進校としても、理想と現実の差を解消していくように努めていく必要がある。 ②一人一台端末の授業における利用向上の取組は一定の成果をあげている。	①「全体的に生徒は真面目で落ち着きが見られ、熱心に授業に取り組んでいる。」というコメント等からも、本校の教育活動については一定の評価を得ている。しかし、「地域の中堅校」という認識から、いわゆる「進学者希望校」へと進化していくための方策が求められており、併せてインクルーシブ教育実践推進校として、すべての生徒にすべての教育をという理想を実現していくためには何が必要かを常に考えていく必要がある。 ②一人一台端末の利用については一定の成果が上がっているが、今後は教員側のスキルの向上が一層必要になると考えられる。	①生徒の多様なニーズに応じていくため、授業観察や研究授業等を通して、全教員が常により良い授業を追い求めていくとともに、地域の中堅校という地元の見方から脱却していくための方策を見出していくべく努めていく。 ②情報機器の操作等については、教員によって習得している知識等に差異があるため、次年度当初から研修会等を開催して格差を縮小していくるように配慮する。
2	生徒指導・支援	①安心・安全な学校生活を保障するとともに、すべての教育課程を「支援」の観点に基づいて検証・改善していく。 ②生徒の自己表現・自己実現の機会を充実させ、協働と成功体験の積み重ねによる豊かな人間性を育む。	①授業を大切にすることで態度を育成するとともに、自他を尊重した、「生き方」「在り方」を育む。また、支援を必要とする生徒のための教育相談体制を充実させる。 ②生徒が主体的に企画・運営を実施できる学習機会・学校行事を検討しその実現を模索していく。	①遅刻が授業や周りに与える影響を生徒に理解させ、学校全体で遅刻を減らす。 ①サポートドックなど生徒との個別面談を通して支援ニーズを把握し、生徒理解を進めながら適切な相談体制の確立を図る。 ②生徒会主催行事の準備・運営に、生徒会執行部や関係委員の役割を作り、生徒の主体的参加を促進する。	①学校全体として遅刻する生徒数とその頻度が減少したか。 ①支援ニーズを適切に把握し、生徒理解が促進され、相談につなげられたか。 ②生徒会主催行事に生徒の役割が与えられ生徒の主体的参加がみられたか。	①学校全体として遅刻する生徒の数とその頻度は大きく減少した。 ①サポートドックでは生徒の回答を得て、アラート表示のある生徒との個別面談の機会を設定することができた。少数ながらSCとの継続面談につながったケースもある。 ②津浜祭では全校生徒を巻き込んだ企画を生徒会執行部が計画し、全校生徒による人文字撮影など行事運営の難しさを体験させることができた。	①学校生活の安心・安全を保障していくために、学校全体のルール・マナーの意識を高めていく必要がある。 ①SCやSSWをまじえた生徒の支援に特化した学年会の設定などの時間確保は難しい。会議開始時間を早めるなどの措置をとる必要がある。 ②長期的な見通しをもって行事の計画・運営・振り返り・改善などを生徒に考えさせることは難しい。生徒とのコミュニケーションを一層密にする必要がある。	①遅刻者の減少については先生方の指導の効果が表れている。 ①生徒との個人面談の機会が充実しているのは大変重要だと思う。こうした面で前進しているのは素晴らしいことで、より充実することを目指してほしいと考える。 ②生徒による行事の企画・運営では、津浜祭（文化祭）や学校説明会で主体性が感じられた。日常の学校生活が確立してこそその行事であることを常に意識させ続けてほしい。	①②不必要な欠席・遅刻・早退をなくしていくための粘り強い指導が実を結びつつある。それは、生徒の学力向上にもつながり、皆で学習や学校行事等に取り組んでいこうという意識の向上に貢献している。 ①生徒との個人面談を通じて多様なニーズを認識し、個々に対応することにより学校の生徒理解、生徒や保護者の学校理解につながっている。 ②生徒が主体的に企画・運営に取り組んでいく学校行事では、教員はサポート役に徹するなど、生徒の社会性や自主性、積極性の育成に力を入れていく。	

	視 点	4 年間の目標 (令和6年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①キャリア教育の視点に基づいた進路支援とカリキュラムマネジメントに取り組む。	①様々な教育力を活用し、個々の生徒のキャリア意識を高める取組を推進する。	①スタディサポートや進路説明会等を通じて、各生徒の適性把握やキャリア意識の向上を図るとともに、Classi と連携することで、個別最適な学びを充実させ、進路希望を実現させられるよう支援する。	①様々な指導を通じて各生徒の進路希望や適性を正確に把握し、個に応じた支援を行うことができたか。	①スタディサポートや R-CAP などを活用し、自らの適性を把握することができた。また、朝学習で用いている Classi と連携することで、個別最適な学びを充実させた。さらに、進路説明会の開催に加え、今年度からキャリアセンターを開設し、生徒自ら進路について調べる環境を整えたことで、特別募集生徒の進路決定が 100%になるなど、個に応じた支援を行うことができた。	①今年度からキャリアセンターを開設したものの、1・2 年生を中心に来たことがない生徒も多く存在している。多くの生徒に対し支援していくために、キャリアセンターの施設の充実や周知に力を入れていく必要がある。	①キャリアセンターの活用が少ないところが課題だと感じる。授業の一環として利用することも考えてはいかかかと思う。	①今年度は年度途中に進路室からキャリアセンターへの配置換えが行われたために、生徒側の認識度があまり高くなかったと考えられる。令和7年度は当初から新しくなったキャリアセンターの魅力と利用方法等についてすべての生徒に周知していく。	①次年度は年度当初にキャリアオリエンテーション等においてキャリアセンターの役割や利用方法について生徒全体に周知し、年間を通じての利用が円滑に進むように取り計らっていく。
		②系統的な進路支援体制の構築とともに、個別支援を充実させ、一人ひとりのニーズに合った進路実現を目指す。	②生徒の個性や進路意識の段階を踏まえ、個に応じたキャリア教育を推進し実践する。また、キャリア教育の視点を生かした教科指導、特別活動の指導内容等を研究する。	②Classi を活用しポートフォリオを作ることによって自己分析を行うとともに、総合的な探究の時間を通じて、自分のキャリアを主体的に想像することができるよう支援する。	②生徒一人ひとりが、自らの希望や適性を分析し、主体的に進路を切り拓く支援ができたか。	②総合的な探究の時間での進路探究や分野別の説明会などを通じ、主体的に進路を切り拓く支援を行うことができた。	②スタディサポート、Classi を活用し、個に応じた学びを充実させることができたが、次年度以降スタディサポートは進路に向けたサービスが追加されるため、さらに活用することで生徒の進路に対する意識を高められるようにする。	②一人一台端末の、進路活動等、教科以外での利用率向上は道半ばである。今後は学校生活全体で文房具のように一人一台端末を使用していけるようにする取組が必要と考える。	②生徒が一般社会に出たときには、情報端末の操作が不可欠であることから、授業だけにとどまらず、学校行事等においても端末を利用した取組が必要であると考えている。	②今後、授業以外の場における校内での情報端末の利用について、何ができるかを検討していく。
4	地域等との協働	①地域への貢献と地域資源の活用を両立させ、地域とともに育ち、地域とともに伸びる学校を目指す。	①地域、大学、専門学校、企業、行政機関等に加えて、武山支援学校分教室との協働連携を促進し、本校の教育力の向上を図る。	①学校運営協議会や武山支援学校分教室と連携しながら、地域貢献活動、大学や専門学校、企業、行政機関等による出前授業などを通じて、本校の多彩な教育力の伸長を図る。	①地域、大学、専門学校、企業、行政機関等との協働連携するための働きかけを行い、実践できたか。	①大学や専門学校の出張講義や地域や行政機関等の催しを通じて、地域の教育力を本校の生徒に活かすことができた。武山支援学校とは、作業アセスメントや文化祭などで連携することができた。	①各種学校説明会や地域でのイベント等に生徒が参加できるよう、周知する手立てを充実させていく。	①学校説明会に多くの生徒・保護者が来校したが、志願変更前の倍率が「1」を下回ったことをどうとらえているか。選ばれ続ける津久井浜高校であるための魅力づくりに関する発信が今以上に必要である。	①②近隣の中学校からは「津久井浜高校に行きたい。」という生徒が多数いるという声が聞こえてくることから、地元の中学生にとって本校は根強い人気があることがうかがえる。今後は情報発信の機会をとらえて、今以上に本校の魅力を伝えていくことが肝要である。	①外部機関との連携については、今後も現行の取組を踏襲することを基本とするが、連携先の追加・変更等には柔軟に対応していく。
		②信頼される学校づくりのため様々な状況を外部に情報発信する。	②本校の教育活動について、保護者や地域に向け学校説明会を始めとし、より広く情報発信に取り組む。	②ホームページや学校説明会、中高連携事業の内容を充実させ、本校の教育活動について情報発信する。	②ホームページや学校説明会、中高連携事業において必要な情報を発信することができたか。	②学校説明会などでは、生徒会を中心とする生徒にもスタッフとして参加してもらい、情報発信することができた。	②ホームページで学校説明会などの情報を掲載したが、申込のリンクがうまく機能しない事例があった。	②保護者は学校の様子を子どもとの会話や学級通信等を通じて把握することが多い。できることは限られるが、中学生等にも学校の様子をぜひアピールしていただきたい。	②保護者は学校の様子を子どもとの会話や学級通信等を通じて把握することが多い。できることは限られるが、中学生等にも学校の様子をぜひアピールしていただきたい。	①②学校説明会や、中学校で行われる進路説明会における説明内容を精査し、魅力や特色をあますことなく伝えていくとともにホームページの更新回数を増やすなど、これまで以上に情報発信に積極的に取り組んでいく。
5	学校管理 学校運営	① 不祥事ゼロに向け、教職員が一丸となって、風通しの良い環境を醸成する。	①性犯罪・性暴力をはじめとする不祥事を根絶し、生徒が安心して学校生活を送れるよう、教職員の規範意識醸成や校内環境の整備を行う。	①セキュリティ対策を万全にし、善悪の判断や倫理的な規範の基準等を再認識するとともに生徒の模範となる教師像の構築に引き続き取り組む。また、生徒が安心して学べる環境づくりに取り組む一方、生徒が相談しやすい雰囲気を作る。	①教職員は性犯罪や性暴力についての問題の認識、予防策、対応策の研修を十分に受けたか。学校の環境と文化は安全で、尊重と平等を重視することができたか。	①適切な場所と時間帯に施錠や安全対策を実施し、生徒が安心して学べる環境づくりに取り組むことができた。また講和型の人権研修を行ない、教員の意識向上を行うことができ、生徒が相談しやすい環境を作れた。	①日々変化する学校を取り巻く状況や生徒の意識や行動について教職員は問題の認識、予防策、対応策について考え、必要な研修を今後も継続していくことが大切である。	①校内を見させてもらっているが、安全対策等はしっかりしているなどという印象を持った。	①校内において廊下等の外から見えない場所をゼロにすべく、各部屋の内部整理を行う等、不祥事の可能性がある事柄の改善に取り組んだ。	①不祥事撲滅は永久のテーマであり、次年度以降も引き続き取り組んでいく。
		②「働き方改革」を新たな創造に結びつける。	②「働き方改革」を推進していくため、教職員が健康で働きやすい職場づくりを進めていく。	②業務内容を見直し、仕事の不公平感を是正する。また、情報共有、複数対応の徹底を図る。	②タイムマネジメントを確立し、余力を他の教育活動等に振り向けることができたか。	②衛生委員会等を活用して業務内容を見直すとともに、デジタル採点システムの導入などで職員の業務量圧縮に努め、職場環境の改善を図ることができた。	②精神的に病んでしまったり、ストレスを溜め込むことが少なくないので、リラックスできる時間を持てる工夫とネガティブな思考を避け、ポジティブな考え方を意識することができるよう、必要に応じて、精神科や心療内科の専門家に気軽に相談できる体制をつくる。	②「働く場所」としての学校という視点は大切だと思う。ただし、教育の視点としてみただけに高校授業料無償化等が行われると定員割れの可能性も出てくるので注意が必要である。	②教員の働き方改革は道半ばであり、教員の健康維持と県民に対するサービスの両立を図っていくことが必要である。	②教員の働き方改革は、学校・保護者・地域等の相互理解がないと進んでいかないので、今後とも学校の立場を粘り強く説明していく。